



南
北
太平記圖會
貳編
貳

1989
10



門 18
1989
卷 10

南毛得能
南無不可思義光如來

歸妙書十方無見光如來

2

南北太平記圖會卷之九

貳編

目錄

- 高時重發遣援兵
- 獻誓紙高氏上平維
- 感未來記親光屬官軍
- 範家伏田畔射高家
- 高氏挂河陣勝敗
- 露逆心高氏越大江山
- 高氏篠村募義兵
- 八幡廟高氏籠願文
- 官兵武軍對陣雒陽



通治内野戰高氏

長宗再度露勇力

三方官軍圍六波羅

時益仲時沒落帝都

瞞野伏中吉全身命

新帝上皇沈落江州

仲時主後自殺番馬

千劍破寄手敗支南都

正成傳令討歸軍

一一

南北太平記圖會卷之九

貳篇

高時重弁遣援兵

殘誓紙高氏上雜

先朝船上御座有て諸方へ諭旨と被成候し依り國々軍武家も叛て却る京都と攻むと企候間征之又伯州へ討手と指下し〜〜得共折節京都無勢あり其事難調ひ関東より速し御勢と可被上由頻ふ早馬と打と告〜〜相換入道大し警と去と重て大勢と指上せて半々京都と警固し半々船上可向と評定在て名越尾張守と大将とて宗徒外様の大名二十人を被催れども此人々等々去年より千劍破し向ひ親と為付子を討せと愁し沈し或は病と号してぬけと本國へ下りし事なれど此度の下知し應じ〜〜兎角し事と左右に寄て不上其故ハ相州禪門前代の法と破り〜〜奢し起るせし〜〜

上と字ぶ下るれば或は田樂猿樂又犬闘雞合せ等の遊興鎌倉中八中、
 不及近國遠境までも是と弄ぶ夫而已る其頃鎌倉様とて國々
 流行せし身小無位者も綾羅と着し大なる烏帽子とせ錦繡
 と以て大口に直垂ハ黄まゝ白さ綾種の小紋に浴付てりまゝ綾の上
 紋重々何まを何まとも雜見分又人の郎等下部とも古く替りて
 分く當り過奢有り有様皆以て然る依之國々金銀米穀減じ民
 自ら貧しく諸國盜賊起つて往來これが為る苦む加之一兩年の内り西
 度の大軍を動しぬま負薪の憂休時其弊幾千万といふ事と不
 知か遠く此度如何催是で々といふも上下貧しく可上助けけ
 まど終り下知し不随し十小八九不為上洛其中足利治部大夫高氏
 へ父の喪し董らま所勞の事ありて起居未快々々此度上洛の數小加
 へ催促度し及ひくれ高氏心中憤りて含で思ひまぐる我父の

喪し居て三月とて悲歎の涙味乾又病心身之侵て負薪の憂未休處に征討の
 後可随旨被相催是を遺恨され時移り更變て貴賤雖易位被北條
 四郎時政が末孫也人臣として年以て我源家累葉の族也王氏と出て不遠
 此理と知るが一度も君臣の儀も可存小是との沙汰し及ぶ事偏小身不
 肖ふより故也所詮重て尚上洛の催促と加ふる程も一家と尽て上洛し
 先帝の御方ふ参りて六波羅と責落し家の安否と可定者として心中不被思
 ふ人更に知更さるる是偏に舍弟兵部太輔直義の薦め被申處
 あり相摸入道可斯事と不慮に藤九郎門尉と使て御上洛延引不被
 心得一日の中小兩度まで被責られ高氏に及逆の企已し心中におひ
 被定てくれ中異儀し不及不日上洛可仕と返答し則ち夜と日小継
 其用意し被及るが御一族郎従の不及謂女姓幼稚の君達も不殘皆
 可有上洛と聞えられ長壽入道圓喜深く怪急ご相摸入道の方参て

申るる誠少くは哉。覽足利殿を御臺君達まで。皆引具し進らせり。御上洛うれ。事の體怪しく存候。加様の時の御一門の疎まぬ人ごも御心被置ひべし。況平源平西家の貴族も。天下の推柄と捨うる事。年々これハ謀叛をと思ひ被立事とや候。覽異國より吾朝に至る世の乱れ。この時の霸王諸侯を集めて牲と殺し。血を吸く二心毎らん事を盟ふ。今の起結文是也。或は又其子を質し出して野心の疑と散む。木曾殿の其子清水の冠者と右大将殿の方へ被出さるの類ひ。加様の例を存ひ。如何様足利殿の御子息と御臺所と鎌倉と被留申て。一紙の起結文を書せ可被違し。とも存ひと申。くれが相摸入道実も。や被思々む。頭て使者を以て申遣し。く。東國へ未ど世閑く。御心安らるるごとく。幼雅の御子息も。皆鎌倉に留置進らせられ。次に西家の體と。一。水魚の思ひと被成ひ上。赤橋相州御縁し成ひ。彼此何の不審う。い。諸

人の疑ひを散ぜん。為少く候。ま。一紙の誓言と被留置ひ。む。公私り付て可然し。存ひ。の事。う。う。足利殿鬱胸益深。く。憤りを押へ。気色も。不被出。是。御返事可申。と。使者と被返急。舎弟兵部大捕直義。其。高上杉細川畠山等。被。此。如何と意見と被問。直義頭を傾け。且。被申。今。此。大事と思召。被立事。全。御身の為計。あ。只。天。代。無道と誅。君の御為。不義を退。ん。と思。あ。其。上。誓言ハ神と不受。し。を申習ひ。設。ひ。偽。起請の詞。被裁。ひ。も。神佛。も。忠烈の志。を守らせ。う。の。で。就中御子息と御臺所と鎌倉に留置進らせ。の。事。大義の前の小事。少。ゆ。強。御心を可被煩。あ。公達未御幼稚。ゆ。自然の事も。あ。ん。時。其。為。少。被。残。置。の。郎。從。も。何方へも抱さ。拘へ。隠。奉。り。候。ひ。御臺の御事ハ。赤橋殿御坐。ひ。ん

程の何の御痛敷事候へ。大行不顧細謹として申候へ此等程の小事
可有猶豫一わづら免も角も相摸入道の申さむ終し随て其不審を令
散御上洛ひて後大儀の御針略と可被回しつゝ伸らるれば高氏此
道理と服し子息千壽王丸と。御臺赤橋相州の妹を後會ふ被留置
一紙の起清文と送りて。相摸入道へ被進りりあぞ。是は不審故とて表悦の
思ひとす。高氏と招請あつて様賞讃あじ上。相摸入道被申り其
許の御先祖累代の白旗あり。八幡殿より代々の家督し傳へ被執
重宝ありゆひりり。故頼朝卿の後室二位の禪尼相傳しより當家
み所持する處より。其家におのゝと希代の重宝と申さる。他家に於
て其詮よりいれ是を此度の餞送り進どひ。此旗を被差て急ぎ凶徒
と御退治可有也として。錦の袋に入らる。自ら是と被渡。其外乗替り
為として飼り馬し白鞍置て十匹。白幅輪の鎧十領黄金作り太刀一腰

副て引とる。高氏心中此旗の我手に入事。故右大將の如く。天下の武將
より瑞相と喜悦し。則ち拜受りて殿中へ退き。舎弟直義吉良上
杉に木細川今川荒河以下の一族三十二人。高家の一類四十三人。都合其勢三
千余騎。名越尾張守高家と三日先。元弘三年三月二十七日。鎌倉へ
立。四月十六日。京都小着せしむる。

評小曰。嗚呼。高時入道思慮何ぞ如斯淺き哉。長寄田喜偶此事を
謂とのども。僅し盟文と千壽丸。御臺の質し心解て之を許し。これ
又思ふ軍中し妻妾幼息等を引具る事。古今未ど其例を不聞
怪まじし。是謀叛の支露顯せり。何ぞ其宿所へ押寄て付たり。或は
私し召寄て刺殺さる。何の大幸らあるん。若高時一人の肺肝を
あるの智あらず。高氏の命甚だ走らむ。高時其智あはして却て
害を招くに至る。是天運の尽り所。又高氏北條し縁を結ぶて數



範家
 田疇
 伏
 名越
 高家
 射
 図

太平卷二
 菅原卷九

代其恩惠依て家の繁昌先祖より不嗣而して別は是といふ功は
昔源平の両家朝の御固とさういふも。更上上下の異論あり。
唯恩を以て主とさる事。古より以て然り。去バ主君の録と食
ふより。私の事を以て及逆の志と差狭む。其心賊と曰。直義師直
の二人北條の政事の乱まん事を知て。よりより高氏に謀叛を
すめ。とて。天下の為君の御とめと口賢く溜うんとす。案
足利我一家の柔えを以て謀叛を企て。つて。紛所

感未来記親光属官軍 範家伏田畔射高家

爰に結城九郎左衛門尉親光。北條宗徒の勇士と被憑らる。其宿所
四条毎車小路近辺。又ハ京中の上下天王寺未来記の寫し文と拜見
す。皆心の信むる。とて。六波羅の聞えを恐る。頭露し。沙汰せ。兩
の徒然茶物語の次手あり。是事と沙汰し。私言う。じ。程。結城が若

堂此と聞て。秘に主人に語り。親光も内々聞つる事ぞ。とて。密に案文
と取て披見せ。明鏡に万像の如浮信と取て。これ。無道の逆臣。順
て萬乗の君に向ひ奉て。弓と曳う。今生ハ更へ来世三悪四趣の苦逃か
らんと。先非骨髄と透て。ん。た。れ。寄。捕正成ふ心とよ。何とて罪を
當今に被免苦と後世に助う。やと。又船上に使を弛て。御方一候。其
使の飯を不待手勢を引具し。赤松が山崎の陣うぞ加り。其外在
京國の軍勢轉漕し。疲ま。五騎十騎領國へ飯り。或ハ時の運を謀て
宮方不属。ら。間官軍の度。の合戦。打負る。とて。勢ひ弥重り。
武家の戦ふ毎に勝つ。とて。兵日。減。角。如何有。とて。世を
危む者多。り。り。足利名越の兩勢又夥し。上洛。とて。何
し。人の心替て。今ハ又何事。可。有。と。色。と。直。勇。合。角。足利高
氏の京着の翌日。より。密に船上へ使を進せ。御方。可。参。由。被。申。上

たり々れが君殊に敵感有て。諸國の官軍と相催し急朝敵と可治異
 由の論旨を被成下り。而六波羅も名越足利兄弟に斯企有て
 しの思ひも可寄支う。日くし參會て先八幡山寄を可被責に
 のこみて内終一し心底を不殘被尽たりてそよりれり。大行之路能
 推車若比人心夷途巫峽之水能覆車若比人心是安流也人心之好惡苦不
 帝云云。足利殿に代々相州の恩と載さ徳を荷て一家の繁昌恐く
 天下の人肩を可並もかり。其上赤橋前相摸守の縁不成て公達
 數多出来うひわれ。斯不義の二心ありて。相摸入道も混れ被
 くりも理あり。八幡山崎の合戦四月廿七日と被定られ。名越尾張守高
 家七千六百余騎大牛の大將として鳥羽の作道より被向。足利治部大
 輔高氏の搦手の大將として五千余騎西岡より被向。八幡山寄の宮
 軍是と闘て去。雅河に出合て不慮に闘ひと決をべり。千種頭中將

忠頭朝臣へ五百余騎して大渡の橋と越て赤井河原に被磔。結城九郎左
 衛門尉親光へ三百余騎して狐河の辺に差向ふ。赤松入道山心へ三千余騎
 て淀古河久我畷の南北三箇所陣と張中院定平朝臣殿法印良忠へ五
 百余騎して雄山と後より備たり。是皆強敵を拉ぐ気天と廻り地と頷む
 ともろ機を磨き勢を呑む。今上りの東國勢二万二千余騎に對て
 可戰と見え。足利高氏に兼て内通の子細あり。若謀りや
 仕うの覽とて坊門少將雅忠朝臣寺戸西岡の野伏五百人驅催は。若藏
 邊に被扣去む。搦手の大將高氏に未明に京都を被立申わ。不安思ひ差も
 披露あり。大牛の大將高家去。早人先と被懸ぬ。不安思ひ差も
 深さ久我の馬の足も不立泥土の中へ馬と打入。我先に進み。名越高
 家へ元より気早さ若武者。故名越遠江守が男。其父遠州八千劔破
 の陣にて益詮伯父甥口論して死被申。恨。又其身一門の中。於て

力量人、勝とされば、今度の合戦人の耳目と警し、父が耻と雪さ亦名と揚ん
 びら者と兼て期し、事なれば、其日の馬物具を符し、至りまで當りと釋し
 て出さる。花曇子の濃紅、染るる鎧直垂と着て、紫絲の鎧、金物重く打
 り、透間もあく著下して、白星の五枚甲の吹返し、日光月光の二天子と金と銀
 あく掘透し、打らるる措頸し、著成當家累代の重宝し、鬼丸と名附黄金
 作の圓鞘の太力、三尺六寸の太力を帯添、鷹薄部尾の矢三十六指、うら苦
 高し、負り、黄尾毛の太く、遅し、三本唐笠の紋と金貝し、磨らるる鞍をねま
 厚總の鞞の燃らるる計らるる懸、朝日の影し、映どく光り渡り、見えさるる。動すれば、軍
 勢より先し進み出さるる當りと拂あく、彼をたれば、馬物具の體軍立の右様適
 今日の大手の大將は、是らんめりと知ぬ、敵もなかり、去る自余の兼武者、
 目と不懸、此し、用合せ、彼し、攻合て、一人と討んと志し、たれども、鎧し、たれば、裏
 かく、夫もさる。打物達者なれば、迫付敵と切し、落を、其勢參然し、るる、小辟易し

て、官軍數千の士卒、用き、靡きぬと見え、さるる。爰し、赤松の一族、小佐用
 左衛門三郎、範家とて、強弓の矢、継早あり。野伏軍し、心利て、卓宣公、秘
 せし所と我物し、得らるる兵あり。味方名越尾張守の一軍し、被り、砕已し、色め
 き、渡りを見、態と物具を解て、歩立の射手とあり。畔を傳ひ、藪を潜て
 止あり、畔の陰し、ぬくれ、臥て、大將し、迫付、一矢狙ん、とぞ待らるる。尾張
 守の三ヶ所の敵と暫時し、追搦り。鬼丸し、付らるる血を、釜符し、推搦し、馬上
 扇を用と、雨し、はあく思ふ、夏うけし、磬らるる処を、範家、近くと、觀寄て、引
 結く、丁ど射ら、其矢思ふ、坪を不達、尾張守ら、胃の真甲のなぐと、眉間の真
 中し、當て、腦を破り、骨を碎て、頸のし、ぐれ、矢先、白く射出し、るる、向じ、め
 猛將も、此矢一筋し、弱て、馬より、真倒し、働し、落、佐用、範家、ハ胡録を、叩て
 矢叫を、うら。寄手の大將名越尾張守と、範家が、只一矢と射殺し、るる、續
 け、やんと、呼り、るれば、引色し、成つる、官軍、是し、機と直し、三方より、勝開

と作て攻合も。大将討きて残黨全うば名越が即從七十余騎四途
路に成り引々が中にも主を討きて何地へ可敵とて引返して團死
せりもあり。又深田一馬を馳込で叶りて自害せりもあり。去ば狐河の
端より鳥羽の今在家まで。其道五十余町が間死人尺地もろく倒伏
みたり。

傳云名越尾張守を射止し。任用左赤門三郎範家一あり。範家
の前の大耶城して討死せり。其弟一律師定光と云僧之兄
ふ省らぬ強弓の達者なり。今日名越高家と射止し。然る僧
の名を名乗直と耻て。兄の名と名乗らるるを本文其後一書せ
り。凡良將一人の勝と傍と拂ふ出立を大に禁む。第一敵是を
將とあつて自余の武者に目をつけ。一人を討んと進む時ハ敵の
勇氣盛らるるもの故に良將ハ我と同一甲冑を著せ十人二十人と

左右に置是と装とけり如斯うの時ハ敵方の兵味方の中ハ雜り
大将と勝負を決せんと心懸侍るも何れ大将なりと不辨故に
害を免るり又其出立の羨うを見て之と羨と財を尽して之を作
一人是を用る時ハ家の虚之萬人と用り時ハ一國の虚之其費廣大
なり。昔鳥羽の戦ひに近江國の佳人日置九郎が馬物具傍り
を拂ふに美麗なり源頼義朝臣以外の外ハ気色と損じてこそを
制止せられぬ故に其頃ハ羨うる物具と亡瑞の鎧と稱しけり。名
名越高家勇なりと云ふ兵法と疎か故に果して今日其鎧の
為し命を落し。後赤松則祐楠正成に會て今日の軍の物語り
及ぶ正成曰鳥家若ふして謀うけむば正成して侍らば此軍や
ころ勝て可侍已に敵ハ古我敵の深田と便の戦ひろれば正成ハ里民の
沼田と植る時履で深泥の上で自在に往行する櫓と申物の候と

用意し強弓の兵を深田の彼へ備へ馬の足のまどと浅泥の方を道として軍を進めむ。責る敵の定て深田の彼へ備へる御方を手明と油断し。腹をすく浅泥の道より進む軍を防ひり。其時不慮深田の彼へ備へる強弓の兵を以て深田の上を平地の如く歩寄堅横散し射るる仇夫を多くあつた。敵これを拂ひと思ふとも振らるれば深田と渡ると不能して進退度とらへし。所へ浅泥の道の軍を進めて責立ゆ。何条勝せん。敵の難所へ却て御方の要害と成可申とありければ則祐信服して曰仰せ最賢く此方にも其機とせん。樹と知るゆ。敵と安く拂ひ侍らん。但味方と知敵も知れ。敵大勢うれば味方利あつた。然まとも鎌倉の兵これを不知と見えれば味方知乏む。必ず勝と覚る。加様の物用ひ候。夏七書ありとも不謙。又已前本朝

に於て勇武の才ある人の用ひの事も不問。正成は如何し御存候と尋られば。楠打矢て某が本國ふ新し開き大なる池の。其四二三里に此彼沼田多くひる。春鷹野と号して彼傍りと打過。里氏の輩深田に我等も安くとて早苗と植ひ程。不思議に存候て尋て侍ま。然ると答ふ是を取寄て一覽し。こゝを實りと意付て自然沼と隔る。戦ひ又深田の中へ一城あんと責か。此物を用ひひり謀如何。可有と存。併里民の用ひ。少く事を替て下板とあげく打侍と存。今山寺の軍の鉢印物語り。付て存合て候と申。則祐と始其座に在合名和。城を頭と低舌を鳴。正成平生の武の謀。意を用ひの事と感。実。楠殿唯人。不在と口へ申。たりと

高氏陣桂河談勝敗

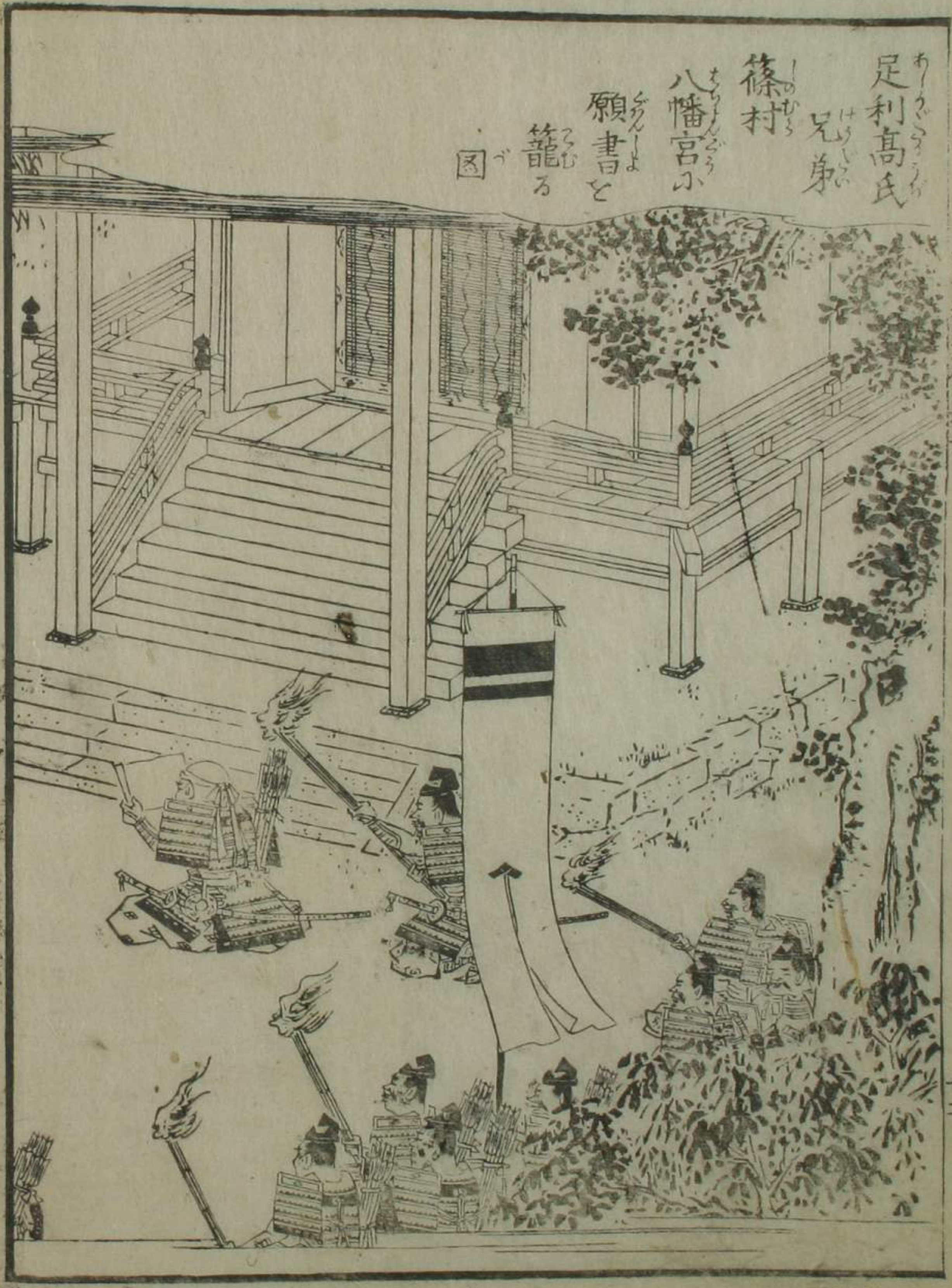
露及心高氏越大江山

追手の合戦へ今朝辰刻より始て馬煙東西に靡き鯨波天地を響いて
 攻合々れども搦手の大将足利高氏の桂河の西の端に下居て酒盛して
 たり。斯處へ荒川治ア大浦御前に進み出御方の追手既に敗れと相見え候
 某先陣を給り少敵と追返し御方を助けひりんと申々れ。今川五郎右
 と存ひ某二陣可仕りていと勇まれば直義彼を近付く私言く被申々ら
 我ホ一家思ひ立事の侍り故に今朝の軍特と怠りひり。此事汝達前よ
 あくせ侍りつども。事多剛に漏る事と弾りて今迄不被申ひ各老
 軍勢共よ此旨唯今知らせ侍りるんとて。高上杉細川畠山志和の人々を
 招き寄て此事を評定せられり。高上杉等始より知事うれども思ひ
 たり。鉢に申々ら。阿那意憂や疾も為知りひら。鎌倉して支を
 発し相模入道と足利へ引取て義勢を集めひとも我等も侍りひつる物
 或ハ帝都へ上洛の上不意に起て六波羅を責まひや。勝利を得て右

べら。今ハ早如何いと勇まれば。細川次郎進出若者の愚案恐ま多く
 候へども。明日まぐら六波羅周章て上る下へ返る。早千種赤松一
 合せ急し京都へ引返して。六波羅へ責かりひ如何いと申々れ。高右衛門
 伊養も被申々ら。我ホいまだ御方貞く京都へ引返し。六波羅の内より
 あら。赤松外より攻寄る。勝と掌の中ありと申々れ。諸人皆此儀
 小同どら。高氏を始より頭を低て一言も不被申。真義も一と剛被申
 たり。進寄て危き事な宣ひ。直義存る旨あれ。先丹波へお越多勢
 と駆催し。其上く免も角も可仕りていとあり。高右衛門重て申様
 御説し得ども。丹波く御勢を集め。未刻際も。関東方
 の我等られ。畿内中國の兵の集り。事ハ不定し。其上追手の味方敗れ
 搦手の足利殿の敵に属して。丹州へ引越る。申ひ。千劍破寄手の
 諸將去。由じ。大事なれ。彼を捨て。京都へ引く。六波羅以下の大

勢と成り容易攻討事不可成。今眼の前、可勝謀の心を、閣と丹波に
 越るふしと心得不待と傳々れども、直哉頭をお振つやと、千劍破の寄手
 城の責口を捨く京都へ引歸らん。あの恐しき捕が、只歸と事や有べき
 唯丹波へとのを被申され。諸將一曰、此上ハ無力免も角も御談し従ひ申
 づきあゆむ。評定と數討とを所。大手の合戦、寄手お負て大将名
 越島家已に被討ぬと告ぐりければ、足利殿兄弟さあ、片時も早く山
 と越へるよりとて各馬、お乗山崎の方と遙の餘所見捨く。大江阪を
 西丹波篠村と指て急がれり。爰に備前国の住人中吉十郎と振津國
 の住奴可四郎と、兩陣の手合、依て搦手の勢、加つてありける。中
 吉十郎大江山の麓、く上手、馬をお牽て。密に奴可四郎と呼くけ
 申々、心得ぬ様、追手の合戦、火を散りて今朝辰の射より始り。搦
 手、芝居の長酒盛、く扱止め、結句名越殿被討、ひぬと聞えぬ。

俄に丹波路を差て馬を早め被申。此人如何様野心を挿り、覚を
 去あへ、於る我等何地まぐ、可相従のや、是より引返して六波羅殿へ
 此由可申と云くれ。奴可四郎伊義も宜ひ、我も事の體怪しく、存
 是も亦如何ある配立ちある。覽と差伺ふ間、早今日の合戦も、如まゆる
 こそ安うぬ。今此人敵と成ると見さる。唯引返して、余り無云甲斐
 覚ゆれ。いざ一矢射く飯らんと云。中差取て打番ひ、夷懸く、炭へ打て、廻
 さん、中吉打警、さこの如何御邊ハ物、狂たれぬ。我等僅に二千
 騎、おの大勢、被取圍、犬死あ、本意とせん。死嗚呼の高名、せぬ
 不不如、唯毎事故引返して、後の合戦、為し、命を全、社忠義を存
 くる者、後の世とも名残りぬ。と再往制止、たれ。奴可四郎も、実も
 思ひ、中吉と共に大江山より引返して、六波羅へ馳参り、事の由を申くれ。六
 波羅の指鋒も被憑、りたる名越尾張守ハ被討ぬ。是ぞ骨肉の如く



足利高氏
 兄弟
 孫村
 八幡宮の
 願書と
 籠る
 図

太平卷二篇九

十二

うれば去とも貳の世と水奥の思ひをせられつる。足利殿より敵にうられぬ。憑木下ふ雨のしるぬ心地して力なきは就ても今迄著纏ひし兵共も又た社にありめと心被置て無端

高氏篠村募義兵

八幡廟高氏捧願文

去程は足利兄弟篠村陣を取て近国の勢を被催り。當国の住人久下弥三郎時重と云者二百五十騎して真前に馳参る。其は符旗の文に皆一番と云文字を書付し。高氏は怪敷覺え。高師直を召て久下の者共の筆符を一番と云文字を書し。元来の家の紋。又是へ一番し参りし。と云符を相尋ぬ。と被申され。師直畏て尋ひし不及其由緒ありしを存て。彼が先祖の武藏国の住人にて。久下二郎重光と云。右大将殿土肥の杉山にて御旗を被揚て。一番し馳参りて候ひし。右大将殿御感ひて。若我朝敵を滅さん。一番し恩賞を

可行と被仰て。自一番と云文字を書て賜候ひし。頃て其家の紋と成し。いと答へ申され。扱は此者最初し馳参りし。時取ての古例され。其恩賞して當国を三千余貫を被行て賞賜殊し。甚し是と聞し。長澤志守知山門葦田余田酒井波賀野小山波。伯部を始其外近国の輩我めくと馳参りし。間無程其勢二万三千余騎し成し。菱田因波羅山寺の城に疾より播磨りありし。菟野彦六児嶋備後二郎位田足立本庄平庄の者共へ今更人の下爪し著し。高氏大江阪より責上ら。我等の道と違へ。北丹波より若狭へ。打越朽木越し。責上らんとぞ相議し。是等の事六波羅へ聞え。扱は今度の合戦天下の安否し。若自然討負る事あり。主上上皇を供し奉て関東へ下向し。鎌倉し都を定め重く大軍を揚て。凶徒を可追討し。評定在り。去る三月より北館と御所し。院内を行幸成奉り。梶井二品

親王の天台座主として坐す。縦に轉變をも御身に於て何の御怖畏も可有れども。當今の御連枝として坐す。且も玉體に近付進らせり。宝祚の長久をも祈給ひんま。日く六波羅に入せり。ひね。加之国母皇后女院北政所三台九卿槐棘三家之臣。文武百司之官并竹園門徒大衆。北面已下諸家之侍兒女房連に至るまで。我もくと参り。褻り被申る。間。京中へ忽ち寂る。嵐の後の木の葉の如く。已に散行む。白河の早晩。栄て花一時の盛と成せり。是も繁程の夢をうん移り。交る世のなり。さま。今更被撃も理也。夫天子の四海を以て為家とす。其上六波羅とくも都近き所なれば。東洛渭川の行宮とす。御心を可被令傷。ハあざれども。此君御治天の後。天下遂に不穩。刻百寮忽ち外都の塵。ハ交りぬれば。是偏に帝徳の天に背き。ゆる故。罪一人に歸して。主上殊り。歎と被思召るれば。常に五更の天に至るまで。夜の御殿にも入せり。ついで。元

老智仁の賢臣と被召て。只堯舜湯武の舊き跡をのぞき。御尋ありて。曾て怪力乱神の徒らる事と。不被聞食。外月十六日。中の申る。うども。日吉の祭礼も。うられば。国津御神も。浦さびく。御誓の錦鱗。徒。湖水の浪に。撻棘。十七日。中の酉。うられば。加茂の御生所。も。け。ま。一條の大路。人瑞て。車と争ふ所も。銀面空。く。塵積て。雲珠光。を失へり。祭りの豊。羊も。不増。凶。羊も。不減。と。つ。う。一。開。闢。と。り。以来。無。闕。如。西。社の祭礼も。此時。始て。絶。ぬ。れ。ば。神。慮。も。如何。と。測。り。難。く。恐。可。有。事。共。也。扱。官。軍。は。五。月。七。日。京。都。へ。押。寄。て。合。戦。可。有。と。定。め。り。れ。ば。足。利。兄。弟。小。待。後。丹。波。の。国。人。其。外。近。国。の。軍。勢。八。幡。山。寄。り。磬。を。う。千。種。赤。松。坊。城。結。城。の。先。陣。宵。より。陣。を。操。寄。て。西。へ。梅。津。桂。の。里。南。へ。竹。田。伏。見。の。迎。え。蓋。火。を。焼。続。け。く。夜。の。明。行。を。待。け。け。り。山。陽。山。陰。の。兩。道。已。に。如。斯。う。り。上。高。山。寺。に。籠。り。居。る。見。寫。萩。野。足。立。位。

田の輩へ僅東山道計しそ困れども。山門猶野心を差控て若勢多
 の手と指塞むふち。龜中の鳥網代の奥の如く可道様も可漏方
 もかたれた。六波羅の兵ども面勇めり色と見せれども。心の下の仰天恐
 怖の愁ひと抱たり。彼雲南萬里の軍戸有二三丁抽一丁と。況や又千劍
 破程の小城一ツを責むとて。日本国中の勢を尽して被向れども。其城未
 落前禍已し蕭牆の中より出て。義旗忽し長安の西に近有ぬ防らむ
 と。もろく兵少く。救へんとす。道塞りぬ哀も兼て。可斯と。ふ知
 と。京中の勢と。透をば。物と。西六波羅と。始諸臣共
 後悔をれども。甲斐どうさ。依て兼高議。今度ハ諸方の款。謀合
 て。大勢より推寄る事。平場の合戦計。叶ふまで。要害を搦て
 時。馬の足と休め。兵の機と扶て懸出。可戦と。西六波羅の館を中
 籠て河原面七八町。堀と深く。壑と。鴨河と懸入。昆明池の春の水。西

日と沈めて。瀰淪。不異。残三方。の芝。築地を高く。築て。櫓と。搯及べ
 逆茂木と重く引。れば。鹽州受降。城も角や。覺。城の構。謀有
 一似。れども。智へ。又却。長。非。劔閣。雖。嶮。憑。之。者。蹶。非。所。深
 根固。蒂也。洞庭。雖。浚。負。之。者。比。非。所。以。愛。人。治。国。也。今。已。天下
 ニツ。分。も。安。危。此。一。舉。懸。合。戦。う。れば。糧。を。捨。舟。を。沈。む。謀。を。そ
 可。致。一。今日。後。足。と。踏。て。絶。の。小。城。を。憑。し。搦。龜。ら。む。と。兼。て。心。を。被。碎
 々の。武。略。の。程。を。拙。れ。去。程。正。慶。二。年。先。帝。五。月。七。日。の。寅。刻。に。
 足。利。治。大。輔。高。氏。朝。臣。二。万。五。千。余。騎。を。率。て。條。村。の。宿。を。お。立。被
 申。々。夜。未。ど。深。う。り。れ。ば。困。り。馬。を。お。て。四。方。を。見。渡。し。被。申。々。條
 村。の。宿。の。南。に。當。て。陰。森。古。柳。疎。槐。の。下。に。社。壇。あり。と。覺。て。燒。荒
 々の。燎。の。影。の。風。を。宜。補。が。袖。振。鈴。乃。音。幽。し。聞。え。て。神。宿。り。何。ま
 る。社。の。知。り。も。戦。場。に。赴。く。首。途。を。馬。より。下。り。甲。を。脱。最。祠

の前、跪き。今日の合戦無事故朝敵と退治を擁護の力を加へ給へと
 祈誓を凝して坐し居る處へ賽し居る巫の却前を過るるを此社如何
 ろ神と崇奉り居るごとく向被申さる。是の中頃八幡宮と遷し進らせ
 以来條村の新八幡と申ひ也と答へ申さる。高氏扱ハ當家尊宗の靈神
 て御座り。機感最も相應せり。宜しう隨一紙の願書と献りやと彼
 申されハ匹壇妙玄鏡の引合より矢立の硯と取出し。筆と扣さる。是と書
 其詞と曰

敬白祈願之事

夫以八幡大菩薩者聖代前烈之宗廟源家中與之靈神也
 本地内證之月高懸于十萬億土之天垂跡外融之光明冠
 於七十餘座之上觸縁雖分化聿未享非禮之奠垂慈雖利
 生偏期宿正直之頭佳哉為其德美拳世所以盡誠也爰承

久以来當棘累祖之家臣平氏未裔之邊鄙恣執四海之權
 柄横振九代之猛威剩今遷聖主於西海之浪困貫頂於南
 山之雲惡逆之甚前代未聞也是為朝敵之最為臣之道不
 致命乎又為神敵之先為天之理不下誅乎高氏苟見彼積
 惡未遑顧匪躬將以魚肉非偏當刃組之利義平勳力張旅
 於西南之日上將軍鳩嶺下臣軍篠村共在干瑞籬之影同
 出平擁護之懷亟蓋相廩誅戮何疑所仰百王鎮護之神約
 也懸勇於石馬之汗所憑累代歸依之家運也寄奇於金鼠
 之咀神將與義戰耀靈威德風加草而靡敵於千里之外神
 光代劍而得勝於一戰之中丹精有誠玄鑒莫誤矣敬白

元弘三年五月七日

源朝臣高氏誠恐々々

とぞ讀上りり々々文章王と綴り詞明う。理濃るれば神も定めて納受

御坐をりんと。閑人皆信を凝し。士卒悉く憑を懸奉りたり。高氏自筆と執て判を居りひ。上差の鏑一筋副て宝殿に被納りれ。舎弟直義と始とて。高上杉仁木細川吉良石塔志和畠山荒河今河以下相順ふ人。我れくと上矢一筋づ。献りたり。同其箭社壇に充滿して塚の如く。積拳より。夜既し明より。々々前陣進む。後陣を待。大将大江山の峠と。打越被申り。時山鳩一番白旗の上。翩翻を。是八幡大菩薩の勝軍擁護の驗なり。此鳩の飛行む。どり。任可。向と下知。れれ。れ。旗差馬を早め。鳩の跡に付。行程。此鳩。困。死。大内裏の舊跡。神紙官の前より。標木。を。田。是利の勢。此奇瑞。勇。内野。指。て。弛。向。其。道。五。騎。十。旗。と。巻。甲。と。脱。降。参。り。高。氏。孫。村。と。出。申。され。一。時。二。万。五。千。余。騎。あり。右。近。馬。場。を。過。被。申。り。時。其。勢。五。萬。余。騎。と。成。り。り。り。

○按ふ足利孫村社参の事。實説より。願文に於て。心。此。書。編。集。の。時。洗。心。子。玄。慧。の。作。所。と。云。也。

○又評し曰。新田楠菊地。結城の輩。官軍に属。り。捨。逆。鯨。順。と。や。い。ん。又。非。を。知。り。美。一。與。と。や。の。ふ。是。等。は。年。比。北。條。の。恩。を。荷。ふ。と。薄。く。故。り。足。利。に。お。ひ。る。數。代。北。條。の。縁。者。と。成。る。家。の。繁。榮。皆。是。其。賜。之。然。る。聊。の。支。と。然。と。舍。こ。重。恩。を。忘。て。敵。と。り。明。く。願。文。を。捧。る。何。ぞ。其。非。礼。を。受。た。ま。り。や。周。武。の。殷。を。伐。る。無。道。を。拂。ひ。代。を。利。せ。んと。欲。り。可。比。校。し。非。む。八。幡。太。神。何。ぞ。是。を。善。し。て。鳩。を。以。て。其。軍。を。導。さ。り。ん。や。若。此。鳩。西。北。に。向。く。飛。ハ。足。利。如。何。兵。を。進。む。と。や。

○綱目の傳し云。神鳩軍を導くも。高氏の家子良後の申傳。不待。又別し書置。物。何事。と。や。有。々。不。心。得。唯。神。の。

位と重くせんと思ふ二つうりぐりと云く○按ふ此後高氏直義
於く靈瑞不思議の事とありともこの皆此例と知べし

官兵武軍對陣雒陽

通治内野戰高氏

去程に諸方の官軍謀合して押寄ると聞えたり。六波羅の六萬
余騎を三手に分て一手の河野陶山高橋小早川と將とて。二万余騎神
祇官の前へ磔えさせて。足利の兵五万余騎と防せ。一手の隅田島津富樫
と將して。二万余騎。東寺へ差向赤松が三千余騎と防せ。一手の糟谷土
屋長井と將して二万余騎。竹田伏見へ差遣。千種防城中院殿法印
等が四千余騎を支へむ。己尅の始より三方同時軍を起し馬煙南
北に靡き閑声天地と響す。此時高右衛門佐師直先陣を承り三
千余騎と率く真先に進め。高氏の軍と十八段に分て跡に進む。京勢も
軍と備る事。十一段して前陣の河野中軍の陶山後軍の高橋小早川へ

敵を待て戦ふ。利ありと見れば敢て不懸出官軍も以前千種殿の
軍に利のうらつらつを知りしを。輒に不懸入。両陣互に支て足輕の射手
を出し。矢軍の時を移る。爰に足利の勢の中より櫛白ひの鎧
の薄紫の母衣を穿る武者一騎。敵の前へ馬を懸居て。高声に名乗る
此身人數うらむ名を知らず。是ハ足利殿の御内へ設樂五郎元
忠門尉と申者。六波羅殿の御内へ我と思ふ人あり。懸合て手柄
の程も御覽せしと云。俟て三尺五寸の太刀を抜甲の真向に差挿し。
矢所少く馬を立ててぞ扣る。其様一騎當千と見えたる所。六波羅の陣
より年の程五十針より老武者の黒絲の鎧に五枚甲の緒を縮て白栗
毛の馬に青總懸て乗る。馬を徐く歩ませ高聲に名乗る。此
身愚家よりと雖も。多年奉行の數に加り。末席を汚さ家なれば祐
筆らんと侮て不合敵とぞ思ひのや。雖然我等が先祖を六利仁



河野通治
内野合戦
の図

太平卷二廿編卷九

將軍の氏族しんぞく。武略累葉の家業ぶりやくるいゑのけいごう。今某十七代の末孫いまのしやうじちだいのもつそん、齊藤伊豫房さいとういよぼう、玄基げんきと云者いふもの。今日の合戦あひびき、敵味方の安否あんひ、否いなうれば命いのちを何なにの爲ために可惜こぼし。死し残り人のこりあらず。我忠戦わがちゆうせんと悟さとて子孫こそんに可たがひ苗なへと云捨すてて互たがひに馬うまと懸かけ合せ、鎧よろいの袖そでと引違ひきぢへ、互たがひに手てと組くみで嚙かと落おち。設楽しやくハ力ちから勝かちりければ上うへに成なて、齊藤さいとうが頸くびと搔かく。齊藤さいとうハ心こころ早はや者ものうれば、拳あぐら様さまに設楽しやくと三刀さんとう刺さす。何なにも剛がうの者ものうれば、死し後のちも互たがひに引組ひきくみぶる手てを不ふ放ほう共ともに刃やいばを突つまき、同どうに枕まくらもそ、卧ふさうられ。設楽しやくハ數年すうねん高氏たかうぢハ恨うらみの意いありし。河詮かせん世よと取とり、いゝも我わが可たがひ榮さかるあらず。討うち負まけひし。我わが可たがひ遁にげるあらず。速すみに討うち死しせし。常つねに思おもひつる。又また齊藤さいとうハ相州さうしゅうの成敗せいばい先代せんたいに替かて、諸人しよじん恨うらみを會あはる。武運ぶうん久くらうと申まをす。相州さうしゅう随侍ずいじの輩たぐひ是こゝを聞きて、齊藤さいとうと悪わるじ。相州さうしゅう禅門ぜんもんの気色きしきも不ふ快くわい故ゆゑに兼かみに討うち死しと心懸こころかけられ。時とき来きる。今日けふ設楽しやくハ出會いて互たがひに本懐ほんくわいを達たつし。哀あはれ。是こゝハ扱置さくぢ東寺とうじの寄

手て甚たく強つよく。中ちゆう方かた危あやし。其その牛うし角かくかゝる急いそぎ東寺とうじの手てを可た救きうと。六波羅ろくはらより陶山たうざんに下知げぢせ。陶山たうざんハ高たか打うち警けいさて、河野かうの通治つうぢに向むかひ。此所こゝの故所こゝ方かたに倍ばいと大勢たいせいうれば、穴あな賢けん此方こゝより懸かり。引具ひきぐ制せいし。通治つうぢハ心得こころえ侍さむらいと申まをす。陶山たうざんハ手勢てせい二百にひゃく余あま騎きを引具ひきぐ。東寺とうじの手てを弛ゆる向むかふ。足利あしひの先陣せんじん高師たかぬし直ただハ敵てきの不出いせざるを見みる。大高おほたか重成ちゆうせいは向むかひ。一軍いちぐん仕して敵てきを呼よび引ひき。下知げぢられ。重成ちゆうせいハ一ひとと聞きて。元来もとより高たか大高おほたかの先祖せんぞ兄弟あには。然しかも大高おほたかハ兄あにの家いへう。今いま師直しただハ威いと被か奪はつ。彼かが下知げぢを受うる事ことを安やすう。思おもひつる。主ぬしの大事だいじ。此こゝ時ときに思おもひ直ただ。仰おほせ王おう。一陣いちじんに馬うまを出いす。重成ちゆうせいハ其その日ひの出い立たち。緋ひの唐綾からあや威いの鎧よろい。鉄形てつがたおろる。甲かぶつちの緒いとを縮ちぢ。五尺ごせき余あまの太刀たちを抜ぬて。肩かたに懸かく。敵てきの前まへ半町はんぢゆう計けい。馬うま驅か寄よて。高たか声こゑに名な乗のり。八幡やっぺん殿どのより。以も来もと源氏げんじ代々だいだいの侍さむらいとて。流石さすがに名なハ隠かくまう。時ときに取とる名なを被か知しる。可た然た敵てきに逢あは。是こゝに

足利殿の御内、大高次郎重成と云者。先日度々の合戦、高名に
 と仰り。陶山備中守河野對馬守のあつせぬ。未練も出合ふ。物
 物出さる。お物て人に見物させ可申と呼。手細肥ぐり馬、白沫
 かまをくねる。河野對馬守の大高、詞を彼懸。えより不堪懸武者
 ろれ。早陶山が制する事と歩志。何れ少も可猶預通治。是在と
 去。六百余騎を引率し陣外懸出。大高重成仕済。今年十
 び通治、組んと相近付。是を見通治。猶子七郎通遠。今年十
 六。成たる若武者父を討せ。と思ひ。真前、純塞て大高、押襲て
 無千組。大高其若武者の總角を脛で中し。擧げ已程の小者と組。勝
 負ハナキ。とさ。差退。其鎧の差符を見。其文傍折敷。三文字と言
 て。着る。河野が子。甥。時。取。の。故。片。手。打。下。切。し
 緒。膝。不。懸。切。落。弓。杖。三。丈。計。を。投。河。野。通。治。最。愛。の。猶。子。を。目

の前、討せ。何れ可憐大高、組むと馳懸る。処へ師直が先手の兵一千余
 騎大高討と云者共と呼。軍を乱し切て懸る。河野通治是を見。六
 百余騎と前後し立。前陣の三百余騎を勇鱗備へ。師直が一千余騎の中へ
 暮直し割て入。手も。八方へ懸散せ。師直が二陣の一千余騎入。目つ
 責戦。河野が後陣の三百余騎前陣を助て横合より打て入。縦横し打
 破。師直が三軍三千余騎河野が六百余騎。追。色。め。立。見
 河野が勢へ會釈も。切。入。河野が軍勢細川の荒手。拵。既
 引色。成。通治馬上。立揚り汚。者。有。様。我。続。懸
 進め。云。俣。馬。と。真。先。進。め。足。利。が。十。八。段。の。備。と。半。菟。破。り。已。高。氏。が
 本陣の前。備。一。軍。と。打。乱。高。橋。を。見。例。の。血
 氣。と。奔。巴。が。三。軍。の。兵。七。千。余。騎。を。下。知。乱。懸。呼。河。野。が

勢とつて成り進む程に。通治打驚て高橋に向ひ未足利の兵軍不破の向
 貴辺の一軍へ備を堅めて跡より御進みへと再三再四申され共高橋へ
 嘲笑ひ我の備を堅めさせ御辺計の高名とせん。と信事うとく御さんられ
 と云捨て唯懸りくと御方を下知して進せたり。河野通治と云一大事
 たり。高橋と云不覚に依る軍の御方の負うるごとく旗打立り手
 勢をられ先程よりの戦ひに討死し又ハ打散され。僅に近衆百余人
 こも残りたり。高氏も六波羅勢の手痛く蒐崩され己の内野を引色り
 見えたり。細川清氏馳来て申様。今ううくと引可給時とあり。急ぎ
 御旗と被進みへとて。自身責鼓を撃て軍を進められ。高氏が本陣後陣
 北残りたる兵三千余騎。是に被勵て備を堅め進む程に。打乱れり
 六波羅勢散り追慕り。四途路に成て戦ふ處へ先討より蒐散せり
 たり。足利の兵此後より引返り。差袂し採合せたり。京勢遂に惣崩

と成て六波羅指し引退く。高橋判官馬を撃て返せりと下知されども耳
 ふ聞入者一人もあつたり。今日の戦ひに通治陶山が言を不用して懸出る
 こと。不覚の始りたるも。己に足利の大勢を切靡け可勝色を顯し
 高橋亦河野が言を不用備を乱して懸りたる程に。斯大敗軍し及びる
 通治も返り合さんと思ひかれも。御方一人も備を堅めり兵うられ。カ
 不及百余騎を後へ河原を東へ引取りり
 長宗再度露勇力 三方寄手圍六波羅
 此時東寺の手へ赤松入道山心三千余騎して向ひたり。樓門近く打
 寄りて守り信濃守範資鑑臨張左右を顧みて。誰うあつたの木戸逆
 木引破り捨下知り。宇野柏原佐用真嶋等早雄の若者三百
 余騎馬を乗捨て堀際へ走り寄先城の構を見渡せば西へ羅城門の礎
 也。東ハ八條河原の辺に五六八九寸の琵琶の甲安郡をんとて。鑄費て健し

屏と塗前より乱抗逆木と引懸て廣さ三丈余あり。堀とあり流水を堰入
 たり。飛漬らんとすれば水の深さの程と不知。渡らんとすれば捨と引たり。如何せ
 んと差子の筆案と煩ひ立ちり。處へ妻鹿孫三郎長宗馬より飛下堀際寄
 て。弓と差下り水の深さを探りたり。未弭僅に残りたり。扱ひ我長い立ん
 ず。物とと思ひられ。五尺三寸の太力を扱ひ肩に掛貫を脱て抛きて。河
 伯と飛漬りたり。水の胸板の上へも不揚跡に続ひて。武部七郎長五又
 計の小男まが。水の淺うたりとて無是非飛入りたり。水へ甲と越た
 り。長宗訖と見返りて。我總角に取着て揚き。や七郎と云々。武
 部の妻鹿が總角に取けり。と見えたり。鎧の上帯と縮ぐ。長宗が肩へ乗
 揚り。一刻刻と岸に著りたり。長宗かきと打笑ひ。即ち我と捨りて
 渡りたり。其堀引破れ捨んと云。水より岸へ躍揚り。屏柱の四五寸
 餘に見たり。手も腰曳やと引程一二丈あり。挙て。山の如く揚土壁と共に

崩て堀の平地に成りたり。是と見築山の上へ三百余箇所。檜双へる槽よ
 り。指攻引攻雨の降如く。矢と射りけられ。武部は早く崩を残り。堀の陰へ
 身を潜めてこれを避る。妻鹿の鎧の菱縫甲の吹込し。立所の矢少し。計
 打懸る。萬槽の下はと走り入。兩金剛の前へ太刀を倒し。突齒咀をばして
 立ちたり。何とて二王何れと孫三郎とも分兼たり。右様あり。西八糸針唐
 橋と扣えたり。六波羅の兵一万余騎。木戸口の合戦強しと騒ぎ。皆一手小
 成。湯雲の雨と帯て。暮山の嶺に立ちり。如く。東寺の東門の服より。暮
 直し懸出たり。そのや妻鹿も武部も被討め。見えたり。依用兵庫助
 得平源太。別所六郎九条門中山五郎左。赤門相急り。後つて面も不振
 戦あり。あれ討とる。殿原とて。赤松入道。心橋子信濃守。範資。次男
 筑前守貞範。三男律師則祐。飽間上月真島。菅家衣等の兵三千余
 騎。拔連と切懸り。黒烟を立ち。責戦ふ。斯中へ備中國の住人。庄三郎。保

心替りて官軍一属し。結城親光が手し加り。六波羅の軍勢色と夫ひ
 既しあけりて見えたり如し。陶山備中守義高二百余騎を馳來り。御方
 下知し七縦八横し相當り。此と先途と防ぐ如し。内野の戦ひ京勢討
 負しつゝの程しとあれ。一條二條の間し火を懸しつゝ見えし。黒煙空
 へ上り。是と見ろより此手の京勢防ぐべき。義勢もろく。人墾をば七條河
 原へ北退く。一陣破れて残黨全とろろり習ひうれば。竹田伏見の合戦も
 京方の勢散りし討負て。六波羅の城へ逃歸りしれ。勝し乘り三方の寄手逃
 と追あて。維中へ乱れ入。此時陶山義高六波羅の館を心えとて。東寺より
 引返す。六波羅の東の門外し三千余騎を六軍し立待りし。諸方の敗
 軍何れも無恙六波羅の城へ北入る。偶内野の敗軍故し追結らるる城
 へ歸りしつゝ。陶山が前備の二軍團と作て懸出二町餘り敵を追返す。向
 訖度見ま。二ツ引両の旗を立備と堅めて跡し付る進こ來る勢あり。陶山

是足利の勢と見てくれ。長追の悪うろろとて。兩し勢とぞ引入る。夫し
 統き四方の官軍五萬余騎潮の如く押寄て。五條橋爪より七条河原ま
 で充滿し。六波羅を取圍む。十重二十重之去も東一方を熊と用し。是
 是敵の心をしつゝ。輒く責落さんとの術あり。然も六波羅の城中し
 も兵五萬騎し余り。容易可落とも見えたり。千種頭中将忠
 顯朝臣出雲伯耆の兵し向ひ。此城尋常の思ひとす。延しつゝ。千
 劍破の寄手彼と捨る。此後攻と仕ると覺る。緒率心とす。速り可
 責落と被下知り。出雲伯耆の兵共應て。雜車二三百両取集めて。轆し
 轆しと結合せ。其上し家を壊て山の如く積拳て。槽の下へ指寄。一方の本
 と焼破る。此所と掘井宮の御門後。上林坊。勝行坊の門宿共。混甲し。三
 百余人固めし。焼立る煙しむせびて。腹とす。俄し地藏堂の北の門し
 五条の橋詰へ打て出。最前し進こる。出雲伯耆の勢と無二無三。切崩

次、扣えらる坊門少将清忠朝臣と。殿法印良忠が三千余騎を扣えらる陣へ切入らる。不慮のまうれば、僅の勢、鬪り立ちま。出雲伯耆の千種勢と共に河原面三町余りぞ北よりくる。去ども山後、漆石、小勢ありければ、長追して、悪りるん。又城の中へ引籠る。此時六波羅城中の者共、若志をア、く、同時、懸出、ま、引、寄、手、共、足、を、揃、見、入、る。武家可亡運の極、右、右、日、来、名、と、頭、剛、の、者、と、無、勇、氣、數、年、無、双、の、強、弓、と、被、云、精、兵、も、力、撓、只、長、數、を、計、て、此、彼、一、村、立、て、落、支、度、の、外、ハ、義、勢、も、名、と、惜、家、と、重、武、士、も、如、此、何、況、主、上、上、皇、と、始、進、ら、せ、て、女、院、皇、后、北、政、所、月、卿、雲、客、兒、童、女、房、連、至、る、を、軍、と、云、事、未、目、も、見、給、ら、ぬ、更、ら、れ、時、の、声、矢、叫、の、音、懼、戦、慄、せ、ら、み、こ、何、す、く、消、入、針、の、御、氣、色、う、れ、実、理、と、申、痛、く、有、様、と、見、進、ら、ら、る、就、も、兩、六、波、羅、弥、氣、と、失、あ、て、只、惘、然、と、針、う、り、今、を、戴、な、と、者、と

見らる兵うれども、如斯城中の色めさるる様を見て、世の成行をや観どらん。夜、入、れ、木、戸、を、抜、逆、木、と、越、次、弟、く、我、先、と、落、行、ら、る、程、今、義、と、知、命、を、輕、て、残、留、る、兵、僅、千、騎、も、不、足、と、見、え、ら、る

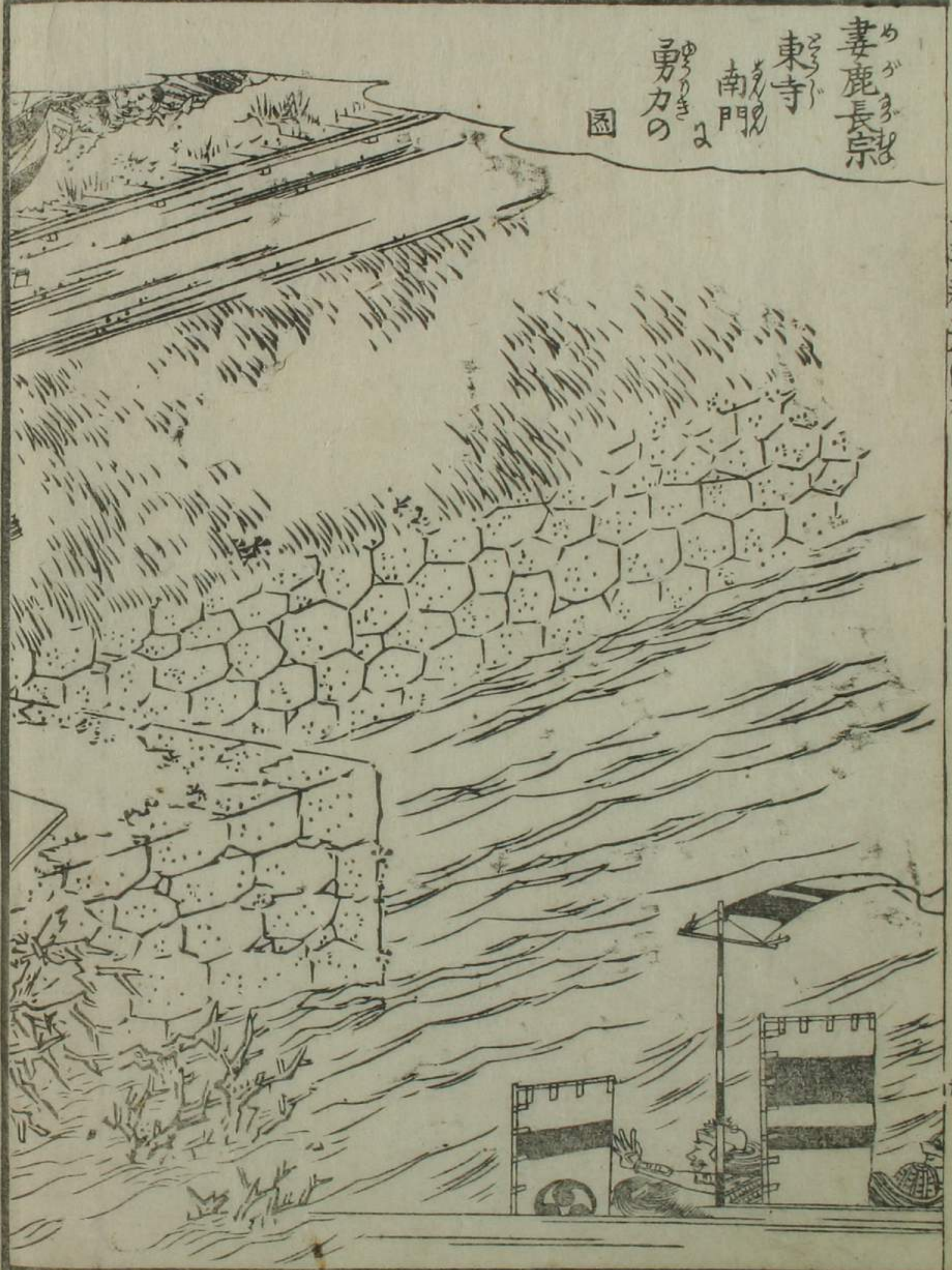
仲時時益没落六波羅 晴野賊中吉全生命

去、糴、谷、三、郎、宗、秋、遠、く、六、波、羅、殿、の、御、前、參、て、申、々、々、の、御、方、の、勢、次、弟、一、落、失、く、今、ハ、千、騎、と、定、む、成、て、此、御、勢、と、大、敵、を、防、ぎ、ら、ぬ、更、叶、ひ、難、く、を、覺、え、み、東、一、方、を、敵、の、手、に、取、廻、ら、れ、ら、る、主、上、上、皇、を、奉、取、て、關、東、に、御、下、ひ、後、重、く、大、勢、を、以、て、京、都、を、被、責、ひ、ら、る。依、り、木、判、官、時、信、勢、多、の、橋、を、警、言、固、く、し、ゆ、を、被、召、具、ひ、り、御、勢、も、不、足、ひ、ま、す。時、信、御、伴、仕、ら、る、程、う、ら、近、江、國、に、於、て、手、差、者、ハ、ひ、ま、す。美、濃、尾、張、參、河、遠、江、に、御、敵、あ、り、とも、不、承、ひ、ハ、路、次、ハ、定、め、て、無、為、に、な、り、し、鎌、倉、に、御、着、ひ、ひ、ま、逆、徒、の、退、治、陣、と、不、可、回、先、思、召、立、り、ひ、ひ、り、是、程、に、淺、間、ら、る、平、城、に、主、上、上、皇

と奮進らせり。差の名将の匹夫の鋒と名を失せり。人事口惜り。事いひあやと再三強く申され。而六波羅実もとや被思々。去先女院皇后北政所と始進らせり。面々の女性少き人々を忍びやう。落して後心閑一方と打破て可落也と評定有て。小串五郎兵衛尉を以て此由院内へ被申さる。れが國母皇后北政所内侍上童上臈女房達に至ると。城中一籠り々々。恐し。思ひぬ別の悲し。後何成行人なる様もあや。歩既して我先と迷ひ出る。只金谷園裏の春の花一朝の嵐に被誘。四方の霞に散行。昔の夢に不異。かくて越後守仲時北の方に向て被申。る。日來の間の後思ひの外。都と去事ありとも。何国までも伴ひ申さん。とも思ひつれども。敵東西に満道と塞ぎぬ。岡のまへ。心安く関東まで落延ぐ。共不覺。御事の女性の身うれば苦く。松壽は未幼推され。敵級ひ見付たりとも。誰が子ともよも志也。只今の程に夜に紛れて何

方へも忍び出り。片辺土の方。も身を隠し。暫く世の静まらん程を待り。道の程事故。関東に着る。頗る御迎の人を可進。若又我等道に被討め。岡の如何。如何。人々相訓。松壽を人と成。心付る僧より。我後世を被訪り。心細氣に土捨て。泪を流して立出。せ。北方に越後守の鎧の袖を和。や角薄情言葉。聞侍る。此折節少き者。んと引果て。ぬ。傍に徘徊。難る。落人の其方様と思。又此日比。知る人の絆。立宿ら。敵に投。被出。我身の耻を見。あ。少き者の命を。人失。ん。変。悲。れ。道。思ひの外。の事。あ。其。え。社。共。兔。角。も。成。果。め。憑。む。陰。る。き。木。本。に。世。を。秋。風。の。露。の。間。も。被。并。置。進。ら。せ。ひ。て。可。生。心。地。も。せ。ず。と。泣。悲。る。ひ。は。れ。が。越。後。守。も。心。の。猛。し。も。流。石。に。岩。木。の。身。も。慕。ふ。別。と。捨。棄。し。遙。し。時。を。被。移。る。昔。漢。高。祖。と。楚。の。項。羽。と。戦。ふ。変。七。十。余。度。ら。び。し。項。羽。遂。し。打。負。漢。の。大。軍。に。被。圍。む。夜。明。に。討。死。せ。んと。せ。り。時。漢。の。兵

めがまは
妻鹿長宗
東寺
南門
勇力の
図



四面より皆楚歌をうりて。項羽帳中に入り其婦人虞氏に向ひ別を告て悲
 と含み自歌を作て曰。カ拔山兮氣蓋世時不利兮驩不遊可奈何虞氏
 兮虞氏兮奈若何と悲歌恍惚して項羽泪を流しつれ。虞氏悲しき堪兼て則
 自劔の上より伏項羽先立て死しつ。項羽次の日の戦い漢の四十萬騎を
 破り二十八騎は被討成出まう。戦めて漢の大將三人の首を取て被討残し
 向ひ我遂に漢高祖が為り亡する事戦ひの罪はあはれ。是天我を亡せんと。自運
 を計て遂に烏江に於て自害し。しも角やと被思知て俱に泣き涙を落さぬ武
 士いさううらう。南方の主將尤近將監時益行幸の御前を仕て打つ。馬
 下乗北方越後守の中門の際まで打寄て。主上早寮の御馬に被召て候
 一。うらや長敷打立せうらめそと云捨て打出たれ。越後守無力鎧の袖に
 取著る。北の方少き人と引放し。椽より馬に打乗。北の門を東へ打出被申
 被棄置人いほく東の門よりまう。ひ出る。左右別を行道し。位悲む声不止

して遂に耳へ笛つて離れもやめ悲しき。落行前の路暮て後ろ心取直し。
 馬に任せて歩せ行曼を限りの別と互に知ぬぞ哀なる。十四五町打延
 て跡と顧みれば早西六波羅の館は火懸。一片の煙と焼揚より五月箇の比
 うれば前後も不見分暗き夜に篝火所々燃えて。苦集滅道の辺に野伏
 充滿て時の声を作り。十方より矢を射立る。左近將監時益頸の骨を
 被射て馬より倒し被落る。糟谷七郎馬より下て其矢を抜が忽ち息
 止りし。何地よりとも不知矢うれば馳合て敵を可討様なり。又忍びて
 落る。道うれば傍輩は知せて可返合ともあはれ。只何れ枕し自害して後
 世にも主従の義を重きより外の事いあはれと思ひつれ。糟谷泣く主の首
 と取錦の直垂の袖に裏に。道の傍の田の中は深く隠し。則腹掻切
 主の死體の上より重く抱者て伏し。龍駕は遠し四宮河原を過
 させり。落人の通るを打留て物具利と呼つる声前後に。夫を射

事雨の降より滋るるれば角て行未とも如何有べきとて東宮を
 於進らせ奉る供奉の御相雲客方へ落散らひける程に今ハ僅に日野大納
 言次貞名勸修寺中納言経頭綾小路中納言重資禅林寺宰相有光外
 ぞ龍駕の前後へ被供奉る。都と一片の曉の雲に阻て思ひて万里乃
 東の道に傾けさせり。劔閣の遠き昔も被思召合壽永の乱とて
 世も角こそと敷襟を惱しつゝ。主上も上皇も御涙更しせさあへど五月
 の短夜明やで関の此方も闇ぐれば杉の木陰に駒を駐て暫く休らせ
 ろふ処に何地より射るもあまぬ流矢主上の左の御膝にまゝなる。陶山
 備中守急ぎ馬より飛下り矢を抜き御疵を吸し流る血雲の御腹に
 浴く見進らゆり目も宙られず忝くも萬乗の主甲と匹夫の矢前に
 被傷て神竜忽ち釣者の綱に懸まる事浅様しり世の中へ去程に後
 目漸く明初て朝霧僅に残るる。北なる山を見渡せば野伏共と覺えて

五六百人が程推と突鏖を支て待懸る。是を見て供奉の面度と失ふ
 て進み兼し如く備中國の住人中吉弥八郎行幸の御前へ候ひける。敵
 近き馬を懸寄て忝くも一天の君関東へ臨幸成処に何者なれば加様の
 狼藉と仕るぞ。心あ者なれば弓を伏甲を脱て通り可奉礼義をあらぬ
 奴原さへ召捕り頸切懸て可通と申られれば野伏の輩呵々と打矢
 ひ一天の君もも渡らせり。御運已に尽て落させり。此後通し進らせ
 ると心得しを申は。輒く通り度思召を御供の武士達の馬物具とて
 捨させり。ひて御心安く落させり。と。去もては同音に時を咄と作る。
 中吉弥八大に怒り。悪き奴原が振舞うまの欲がる物具とてせんと去俣。
 六騎の若黨と共に馬の鼻を突て懸る。欲心熾盛の野伏ども六
 騎の兵に被懸立て。蜘蛛の子を散らす如く四角八方へぞ逃散る。六騎の兵
 共六方へ分きて逃るを追及各數十町に跡八あまり。長追たりける程に

野伏二十余人返り合て。弥八を中一取籠り。弥八少くも不慮其中の棟梁と見えたる野伏一弛並べてむじと組。馬二匹が間一嘯と落て。四五丈計り高き片岸の上より上へ成下し成轉びくる。共一組も不故く深田の中へころび落る。中吉下し成るれば拳様一刃さむむとて腰刀を搜る。轉ぶ間一抜くや落るる。鞘計有て刀はなし。上るる敵中吉が胸板一乗かつて髪を髪を髪で首を掻むとあるる。外し。中吉力加へ一敵の小腕と下と揃りすめて。暫く閑り人可申度あり。御辺我も恐るる。刀が有れば別返して勝負をもせぬ。又續く御方うなれば落重て我を助る人もあじ。去を御辺の半一懸く首取て被出さるる。曾て寔檢も及たぬ。又高名も不可成。我ハ六波羅殿の御難色一六郎太郎と去者一とて見あるぬ人もひま。無用の下部の首取て罪を作りくる。我命を助けて候。其悦び一六波羅殿の錢と隠して。六千貫被埋る所を知て。半引

申て御辺一得させ奉らんと去れば。誠とや思ひく抜るる刀を鞘より中吉を引起して命を助る而已。様々の引出物とて酒をんとを勧め。京連て上りて。弥八六波羅の館の焼跡へ行正。此一被埋るる物と早人が掘り取らるる。得つけ奉らんと思ひ。耳の臍が薄く坐り。くろく敷て空笑して。返りて

新帝上皇沉落江州

仲時主徒自殺番場

中吉が行跡は依り道已に開け。主上其日の條原の宿に著せり。此一々怪し気なる細代の奥尋出して歩立。武者も俄に駕輿の役と成て。御輿の前後を仕り。梶井二品親王是まぐ御伴申さるる。行末とて道程心安く可過とも覺させ給ふ。何地も替り。立思たると思召て。御門後一維らんと御尋有る。去る夜の路次の合戦。或は疵を蒙り。或は心替りて落るる。中納言僧都經超二位寺

主浄勝二人より外に供仕りたる出家坊官一人もひつどと申されば、扱ひ殊
 更長途の逆旅叶ふまじとて是より別別きて伊勢の方へ赴くせり。ひけ
 る。さうして山賊多き鈴麻山と銅る馬の白鞍置て被召しんの中
 道の鎌倉へ。伊馬と皆宿の主と賜ふて。門主の長くと蹴垂る長銷
 の御衣に檳榔の裏もを被召。經超僧都の宿車ひる黒衣に水精の
 念珠半は持て歩兼る右様如何る人も是を見てもや是とて落人
 と思ひぬ者へ不可有去とも山王大師の御加護も依り道は行逢奉
 る山路の推野徑の蘇。御半を引御腰を推て鈴麻山と越奉る扱伊勢の
 神宮氏より人を平に御憑有て御坐りたる。神宮心有て身の難し可
 遇も不顧兎角置進せられ是より三十余日御忍有て京都少靜じ
 ろ六選御成て三四年が間の白毫院と云ふ。御遁世の體も。御坐あり
 たる是は扱置京都の合戦に討負て。西六波羅の主將因東へ落下り被申由

其披露ありけれ。安宅。祿原日夏老曾愛智河小野四十九院摺針番
 馬醒井柏原。其外膽吹山の蘇鈴鹿河の辺の山立強盜溢者二三千人
 一夜の程に弛集つ。先帝第五の宮。親王と申。御遁世の體も。伊吹の麓に
 御坐有る。大將に取奉て。錦の御旗を差揚。東山道第一の難所番場
 宿の東より小山の峯に取上り峯の下より細路の中を夾み待懸る。夜明
 くれ。越後守仲時。祿原の宿を立て。仙躰を重山の深き一促し奉る。都を
 出。昨日とて供奉の兵二千。跡に余り共。次第に落散る。や今の儘に七
 百。跡にも足さる。若跡より追かけ奉る事もある。防矢仕ま。依り木
 判官時信を。後陣に打せられ。賊徒道を塞ぐ事ある。打。道を開
 け。糟谷三郎宗秋を先陣に打せ。鳥。跡に連る番場の峠と越
 む。す。数千の敵道の中を夾み。拍と一面に双。夫前を調て待懸る。
 糟谷三郎。遙し是を見。思ふ。雷國他國の惡黨共。落人の物具と剥ん

とて集りて手痛く當る程に命を惜まぬ戦ふ程の支ぢ
よもあつて只一驅に驅散して捨つて去つて二十六騎の兵馬の鼻を並
へて駈つたり。一陣を堅めたる野伏五百余人遙の峯へ捲り揚られ
て。二陣の勢に逃加り。糟谷の一陣の軍に討勝。今ハトも手は破る者
非しと心安く思ひ。朝霧の晴行終つて可越末の山路を遙に見渡し
たる錦の旗一隊を率の嵐に翻して。兵五六千人が程要害を前々當て
待懸る。糟谷二陣の敵の大勢を見て心屈く馬を扣ん暫く猶預て思ひ
つら。重て敵を懸破らんとす。人馬共疲まて。敵岨に支へる。相
近付て矢軍をせんす。矢種皆尽りて敵若丁の大勢。鬼も角も
も可司も覺えさりけま。藤一辻堂の右々るは皆下居て後陣の勢
をぞ相待る。越後守の前陣は軍ありと聞くと早めて馳来り彼申
る。糟谷三郎宗秋越後守に向て申つる。弓矢取身の可死知りて死せ

されば恥と見ると申習り。つら。実も理りてゆひたり。我等先は近江
美濃参河遠江の間。差るる敵は有る間敷。申つれども加様
都を出し。路次悉く野伏す。行前扱す。如斯うりと疾も
知ゆ。都を討死す。候ひたる者と一日の命を惜みて是を落りて来
て。今云甲斐うね田夫野人の手懸て尸と路經の露。曝さん事こそ
口惜く。敵此所計りてゆひ。身命を捨て打拂ふ。可通ひ。推量
仕ひ。先は誅戮せられ。土岐が一族折を得て。美濃の国と通さ。と
仕ひ。吉良の類も度々の召し不應。遠江国に城郭を構へて
候と瓜岡美りゆ。出合ぬ事ひり。此等の敵を切拂ふ。通り
ひ。事。恐る。万騎の勢。も。難叶。覚候。况や我等落人の身と成て
人馬共。疲ま。矢の一筋も不持成。ゆ。何地を。落延。ひ。只後
陣の。佐々木。御待。て。當国の内。と。ぬ。む。む。城。推。置。て。関

東勢の上雄仕ひもんどを御待ゆ。御計略を被迎ひ事可然存ゆと
 伸ゆれば越後守も此義を存せども。佐々木も今如何うの野心
 存ぞん。憑少く覚ゆれば進退爰に谷つら。面々の意見兼り度存
 也とありければ皆一月に何様此堂に替くきて時信を御待ゆ。彼が
 存兼りゆ上りて評定あめとて。五百余騎の者共皆過堂の庭を
 下居る。此時依々木時信に里計引さる。三百余騎を打せらる。如
 何なる天魔波旬の所為と有らん六波羅殿の番馬の堂下にて野伏共
 被取兼て一人も不残被討給ひしりと告る者ありければ時信其実否
 も不乳大に驚き。今何為様と降人して成て所領を全うせんとて爰
 智河より引返り京都へ上りて。越後守仲時其外の輩時信を遅
 と待々。待期過て時移れば扱へ時信も早敵に成りたり。今何地へ引
 返り何国とて可落るれば棄りて御生害可有ひ皆々御供可申とて阿

野陶山糟谷高橋を始。一言を揃て申々れども。仲時極めておくま申
 されりや。顔色替て無言兼。糟谷宗秋甚多く我手本を御目し可
 懸して侍り。謂も不敵鎧を脱ぎ押膺脱腹掻切て伏しり。仲時
 是を見て刀し手を被奪り。兎角に時刻延々る程に。隠岐判官清
 高。仲時の後へ立廻り由りて不慮首打落し。急ぎ其死骸を抱き付る。
 涼々御腹被召くゆと高色に呼ぶ。息のある骸を少し死骸を御
 動し。刀を取て仲時が死骸の腹に突立り一文字に引廻り。其後已も腹
 掻切仲時の膝に抱付覆りて伏しり。是と始りて河野對馬守。鹽
 屋右馬允。皆吉左京亮。武田下条十郎。岩見三郎。黒田新左衛門。伊
 藤十良兵衛。竹井太郎。関屋八郎。高橋九郎。左五門。日大五郎。隅田源七
 左衛門。日良等二人。村田日向守。上井三郎等。續て腹を切りたり。是
 等ハ仲時日頃も憑切りり良後なり。其外隠岐判官の子息二人。糟谷

上皇
新帝
供奉
六波羅
没落の
圖



北條仲時
江州番場
生害の圖



弥次郎。壹岐孫四郎。窪次郎。岡田平六兵衛。吉井彦次郎。伊賀三郎。
 柳橋次郎。左工門南和五郎。同又五郎。原宗左近将監。此等ハ仲時上京の後
 新参の者共。ほむも仲時の恩。不背。何れも自害。あつりたる。備中國の
 任人安藤太。即左工門入道。元理ハ歌道の達人。あり。仲時是を愛
 常。和歌を誦。時の奥を被。催。今度都を去。退。時ハ仲時頻
 止。彼申。れ。不用。此所。供奉。あつりたる。此座の令。も貴。返。ハ
 年。も老。う。遁。世。者。之。自。害。の。御。供。無。益。う。り。早。何。方。へ。忍。び。り。を。申
 くれ。元。理。弓。夫。取。人。の。扶。助。を。得。り。已。来。加。様。の。所。を。遁。ん。と。露
 程。も。不。存。と。云。て。何。れ。枕。腹。切。り。伏。し。れ。小。屋。木。七。郎。は。舍。弟
 九郎ハ近年仲時の不與を受て。然。の。扶。持。も。預。ら。ず。緒。事。ハ。付。恨。也
 事。の。そ。う。年。を。送。り。侍。り。り。り。此。時。至。も。更。主。後。の。礼。義。と。不
 違。夫。ハ。付。年。比。仲。時。一。諂。一。大。事。の。時。ハ。御。身。一。替。り。奉。ん。と。申。る

人も都。留。又。此。所。と。御。供。と。見。込。も。皆。落。夫。見。ら。れ。於。於
 日。比。の。御。恩。ハ。其。人。より。薄。し。も。豈。主。後。の。礼。義。を。乱。さん。や。と。て
 腹。切。り。失。う。り。岩。切。六。郎。も。某。ハ。常。に。宣。ふ。所。不。違。何。ぞ。今。も。遁。ん。や
 と。何。れ。腹。を。切。り。り。中。布。利。五。郎。左。工。門。吉。治。ハ。密。に。北。ん。と。あ。つ。り。り
 陶。山。備。中。守。義。高。是。と。見。付。良。御。恩。ハ。何。方。へ。行。く。か。隱。便。候。六。波。羅
 殿。差。も。貴。返。を。以。て。一。大。事。の。人。一。思。ひ。ひ。此。故。一。飽。ま。を。御。恩。を。蒙。り。栄
 華。小。誇。り。り。身。の。今。事。の。節。り。臨。で。落。延。り。い。れ。た。と。て。堂。取。を。知。り
 人。の。い。や。生。て。指。を。さ。れ。ん。死。う。其。上。某。角。咄。め。り。上。ハ。遁。を。ほ。京。に
 あ。時。軍。の。道。は。放。く。不。入。貴。返。の。口。入。仕。ひ。り。角。見。若。き。敗。軍。一。及。べ
 各。も。剛。々。山。崎。へ。仲。時。自。身。向。ひ。あ。れ。某。前。を。仕。ら。ん。勝。事。掌。中。に
 あり。進。め。申。る。と。内。田。名。將。の。都。を。出。て。遠。く。戦。ひ。ん。事。廉。忽。一。侍。ら。ま
 ど。申。て。留。り。又。千。葉。屋。の。寄。年。都。へ。引。上。せ。り。某。彼。参。て。在。事。一。引。取

術のひと申々るを。皆御辺の臆病異見。依て前口惜き負を仕て。是味
 方の運の尽るる故。大申。悉く貴辺の行跡。因り。今又命を惜て。此
 むとやく。倫の行跡。非むと。萬声。申々れ。中布利。顔色土の如く。一言
 の返答。も。震ひ。戦慄。計り。一人の良等のあり。心利。者。主の
 中布利。着打落。已も。同く。自害。せ。陶山。入々。の自害。見濟。
 今。思ひ。残。事。己。良等。廿八人。あり。迫。汝等。如何。も
 して。本國。下り。我子。龜。菊。丸。を。二。度。家。を。嗣。せ。故。御。文。
 筆。怒。めて。渡。良等。一。回。今。を。爰。以。事。冥。府。の。所。供。申。上。爲。一。ゆ。心。
 只。今。御。供。仕。ら。ん。と。同。は。ひ。せん。で。申。々。れ。陶山。声。を。励。我。と。死。を。共。せ。ん
 の。易。き。事。之。生。本國。歸。り。我子。を。取。立。ん。維。成。事。之。忠。の。淺。深。何。れ。や
 早。急。ご。ゆ。と。申。々。れ。小見山。依。兵。備。進。出。市。被。去。事。一。ゆ。餘。り
 一。御。供。の。ま。う。ん。御。内。無。人。似。て。侍。ま。三。四。人。可。然。一。ゆ。其。安。一

付て死の御供可仕。て。申。申。庄の七郎。其。手。負。ゆ。是。非。冥。土。の
 御。供。加。り。ゆ。と。申。す。陶山。二。人。事。の。備。れ。あ。り。残。り。速。く。本國。歸。る
 べ。不。然。後。生。を。不。忠。の。者。と。て。良。後。一。ゆ。申。々。れ。と。皆。々
 泣。く。暇。申。て。本國。へ。歸。り。陶山。義。高。今。心。易。く。腹。搔。切。く
 伏。し。り。れ。庄。小見山。の。二。人。も。自。害。し。て。枕。一。臥。し。り。是。等。を。合。て。都
 合。三。十。余。人。其。外。直。の。良。後。四。百。余。人。有。り。皆。散。り。北。へ。或。は。生。捕。も。又。は。被
 討。り。り。主。上。上。皇。此。死。人。共。有。様。と。御。覽。ご。り。肝。心。も。御。身。不。傍。と。

〇按。舊。本。太。平。記。仲。時。尋。常。腹。を。切。り。よ。書。を。然。る。ふ
 大。全。綱。目。等。公。臆。て。腹。を。切。不。得。清。高。の。爲。被。害。り。は。著。後
 是。本。傳。の。卦。り。又。舊。本。同。時。腹。を。切。り。都。合。四。百。三。十。二。人
 也。と。あ。り。本。傳。云。處。三。十。一。人。仲。時。を。加。へ。三。十。三。人。之。此。書。を。胡

元へ渡る時五山の僧四百人増て書するものと云く

去程五宮一附後ひ奉る野伏也。此所迫り来つて主上上皇と取進
せ。其日武佐の宿の長光寺へ奉る三種神器并玄象下濃二間の御本
尊に至ると自五宮の御方へ被渡る。素の子嬰漢の高祖の爲に國亡び
て天子の璽符を頸懸。白馬素車に乗て軌道の傍に跪き降人に出ら
れし亡秦の時不異日野大納言資名卿へ殊更當今奉公の寵臣ありて
如何なる憂目をも見んと身の上を危く被思ふ。其辺の辻堂に遊行の聖
の有る処へれり。可出家由を宣ひられ聖躬を戒師と成て立。是非
髪を剃落さんとあつる。資名卿聖に向つて出家の時何とやむ四句
の偈を唱ふる事の有氣の者にと被仰られた。此聖其文を知らずけん
汝是畜生発菩提心と唱りり。三河守友俊も同じく此出家
せんとして己の髪を洗はる。是を聞て命の惜さし出家とわたり。汝は

是畜生也と唱へり。事の悲しきことなり。入る笑ひたり。如斯今まで
付纏ひ進らせり。御相雲客も此彼に落泊つて出家遁世して退散たり。回
今主上春宮兩上皇の御方振とて。經頭有光兩御より外に供奉仕る
人もあり。其外に皆見狎ぬ。敵の兵前後を被打圍て。怪氣あり。細代典
被召都へ上らせり。見物の貴賤岐よきて。不思後や去年先帝を
置て生捕進らせり。隱岐國へ流し奉り。其報は三年の中より来り。六
波羅滅亡し及ひぬ。事して浅猿に。昨日他州の憂を聞し。今日
我上の責に當り。加様の事を可申。此君もまた如何なる配所へ
被遷させ給ひ。宸襟を惱し。心わらも心も。見人毎に因果歴
然の理を感思し。袖をぬぐふ。あつりたり。

千劍破寄手致走南都 正成傳令追討歸軍

去程昨日の夜六波羅已に被責落て。主上上皇皆関東へ落させり。ひぬ

と楠正成が都より討置する細作今朝卯の刻に千劍破の城へ往進する
 れば正成急ぎ追手の櫓に兵を奉て六波羅よりそ称し御遊の侍り
 て東方へ討せらひてたり御陣より御存し侍るやと声き呼せ
 りる程に寄手の輩城より何事と申て勇むん心えとの者もあり
 又捕が何し謀を仕侍るやん御用心あまきめと皆胸騒ぎして居る
 取へ其日の午の討に都より諸大将の方へ其縁より告来りければ陣大
 周章し何様一日も遅く陣を引らるべ野伏弥重りて山路甚ど難儀る
 べとて其日の未の下討寄手十万余勢南都の方へ引て行正成櫓の上
 て東國の兵の退くを見て家の子郎後詰て云あれ見ぬ人將愚はて意
 めれば數万の兵皆物用不足侍る正成うべ今夜は不叶共弥城を一責せ
 て引退し明日辰の討に軍勢を出して嶺を取兵を備て多る谷より次第
 して引又嶺より向ひの嶺を持て引奉せんとぞりて正成も野伏する

追討事よりべうん敵の難所味方も難所なり然れ牛角より去羊より城
 を圍んで爰に在陣を地の案内に能あつて城より追討し出るるべ望所
 うれ悉く捕もべし又其備の次第に依て城より落せり大名の
 家富て其子孫の武を不知む口惜き事にあはれり時湯浅彦六進
 出時より彼方の陣の何して引侍りやと問正成曰峠の向ふに放れ
 る漢多し峠より此方より跡に引る勢を峠に備て前より峠へ奉り
 たり兵を以て嶺の放まらるる陣を取せ而して峠に三千の勢を残し備
 堅め残る軍勢の先の如く引しめん然らば城より峠を下る勢の半途を
 討んと懸出ん彼方の嶺に備へる兵と峠の三千の兵と引奉る勢と
 三方より一手に成て戦を決せん勝事と所ありと彼申るれば即後
 皆信服も正成又急ぎ三百余人を城より出し引ゆく敵の跡を慕しめ
 下知し曰くあれ見よ各退く敵を支えむと野伏の輩嶺より備て彼者

三...
...
...

...

...
...
...
...
...

福孫

亦逢春

逢春

壽逢春

福孫

...
...
...
...

